

ライブラリー

指導のメモ

今月はフランス文学の中から、若い人達に人気のあるサルトルの「嘔吐」といくつかの「格言集」、「語録」の類をとり上げて紹介することにした。

サルトルはご承知のように、哲学・文学・映画・演劇の他、政治的にも幅広い活動を行なっている現代フランス一流の知識人であり、無神論的実存主義のリーダーでもある。

私事にわたって恐縮であるが、私が初めて「嘔吐」を読んだのは高校の三年の時であったが、有体に申し上げて、嘔吐を感覚的には理解出来ても、何故、例えばワイシャツや紙屑を見て「嘔気」を催さなければならないのか、その理由が分らなかった。同じ頃読んだ「シジフォスの神話」(カミュ)は、自分なりに理解出来たように思うのだが、結局、「嘔吐」の場合、ロカンタンの感じた「嘔気」が「存在」そのものの実感だということが理解出来なかったのが主な原因であったように思う。恐らく、学生達はこれをすすめても、後込みするであろうし、仮に勇敢にくいついたとしても、全てを理解するのは困難であると思われる。それにもかかわらず、敢えてこの作品を紹介するのは、最近になって、続けて二冊の良い本が出た理由による。その一は「サルトル入門」(白井浩司著 講談社現代新書)であり、その二は「サルトルの全体像——日本におけるサルトル論の展開」(竹内芳郎、鈴木道彦共編 ペリかん社)である。「入門」の著者白井氏は慶大

仏文学の教授で、「嘔吐」を初識した人でもある。「入門」はタイトルを示すように、サルトルの人となり、作品、政治的活動のすべてにわたって、分り易く解説してくれている。サルトルを初めて読む学生にとって、「嘔吐」が難解であることは、先にも触れたが、作品にとりかかる前に予備知識として、まずこの本を読むことをすすめたい。

「サルトルの全体像」は、一般教養的な枠をこえているので、かなりの程度サルトルを読んでいる学生でないと、すすめられないが、サルトルに関心を持つ学生には、貴重な本として紹介して置きたい。内容は、戦後20年間に日本の新聞・雑誌に掲載された論文(哲学・文学・政治・作品論)を収録したもので、特に巻末の「サルトル研究主要著作目録」は解題もついていて、貴重である。

*

「嘔吐」(La Nausée 1938) J-P. サルトル (1905～)

サルトルは秀才校の誉高い高等師範学校の哲学科を出、後にル・アープルの高等中学校の哲学教授となった。母のアンヌ・マリーと昨年9月に亡くなったアルベール・シュヴァイツァーはいとこ同士である。学生時代から小説の習作を試みていたが、最初に書かれた長編小説がこの「嘔吐」である。これは初め、「人間存在の偶然性に関する弁駁書」という思想的エッセイとして書かれたものが、デュラールのエッチングからヒントを得て、「メランコリア(憂愁)」と題を変え、更にガリマール書店の

ガストン・ガリマールの意見で、現在の題の「嘔吐」となった。

形式はアントワヌ・ロカンタン(ド・ロールボン侯爵に関する歴史上の研究を完成する為に、ブッヴィルという架空の町に3年前から滞在している)の日記という形をとっている。彼は、アニーという女性と6年前に別れて、現在は年金によって孤独な生活を送っている中年の男である。

さて、このような生活の中でのある日、海辺で水きりをしようと小石を手にした時、ふと嘔気をおぼえ、石をとり落す。日記の冒頭で彼はこういう。「何かが私の裡に起った。もう疑う余地がない」。彼の日常は、この変化、船酔いに似た「嘔気」を追求することに費される。彼にとって、あらゆるもの、例えば、ドアのハンドル、道ばたの紙屑さえも「嘔気」につながるものなのだ。彼は自問する。「変わったのは自分なのか、自分以外のものなのか」と。然し、この「変化」——「嘔気」が何か分るのは、彼がよく行く公園でベンチに腰かけ、マロニエの根の塊りをみつめていた時である。彼はいう。「その塊りは私に恐怖を与えた。それから、私はあの啓示を得たのである」。つまり、「嘔気」が「存在」であり、「存在はそこに、我々の周囲に、またわれわれの中にある。それは〈われわれ〉である」が、それは、何となく不安で、余計なものと感じられるものであり、偶然なのだ。そして、存在の偶然性は絶対的なものであり、それ故に完全に無償なのだ。

ライブラリー

そこで彼の思考は次のように発展する。「わたしに生きる 権利はなかったのだ。わたしは偶然この世にあらわれて、石のように、植物のように、細菌のように存在していた」。然し、彼はここでニヒリズムを語っているのではない。「嘔気」を理解するためには孤独に耐えつつ生きることが必要であり、偶然に存在し、しかも無償であることを知らない、つまり「嘔気」を見まいとする偽善の俗物や奇妙な独学者のようなくろくでなしが必要だったのだ。

この小説の中で、唯一の中心的事件である昔の女アニーとの再会も、彼にとって孤独と不条理を思い知らせるに過ぎなかった。何故ならアニーは「完璧な瞬間」への情熱を失っていたからだ。彼はアニーと別れると、バリへ発つ汽車のくるのを待ちながら、行きつけのバーで何度も聞いた古いジャズを聞く。黒人女は歌う。“Some of these days, you'll miss me honey”。そして、彼は考える。「本を書きあげ、それが私の背後に残るときが確かにくるであろう。……その本を通して、私は自分の生活を何の嫌悪もなく思い出すことができるかも知れない。」と。

（「嘔吐」は白井浩司訳の新潮社版『現代世界文学全集——第20巻』と人文書院版『サルトル全集——第6巻』に収録されている。なお、引用はすべて「新潮社版」によった。）

一般的にいうと、「格言（箴言）」のもつ意義は、ゲーテのいう「卑俗を踏みこえてゆくための指針となる

べきもの」、換言すれば 為されるべき人間の行為に指針を与えるものとして、また、「語録」は原著の一部から引用された「言葉」から、その著書全体に読み手を導く刺激剤的役割をもつことにあるといえる。このような考え方から、以下、「格言集」、「語録」の二つに分けてご紹介することにする。

*

「格言（箴言）集」

これは、著者が初めから Aphorism または Maxim として書いたもので、代表的なものに、ラ・ロシュフコーの「箴言と考察」（内藤濯訳 岩波文庫）、ゲーテの「格言集（箴言と省察）」（大山定一訳「ゲーテ全集——11」人文書院）などが挙げられる。

ラ・ロシュフコーは貴族の出身であるが、フランス人に似ず、笑顔をみせたことなどめったに無い男だといわれている、シニカルな目で人生を眺め、人間の弱さ、利己人をむき出しにして弾劾し、愚弄する。「悪徳を責めるのも、美徳をほめるのも利欲がそうするだけのことだ。」（597）は、彼のこの一面を最も良く示している。これに対してゲーテは、人間的な、高い知恵と深い愛で周囲の世界や時代の動きを静かに眺めながら生きた、純粋な人間の典型と見ることが出来る。彼は、バスカルのように、ひたすら神に頼ることをしないし、また、ラ・ロシュフコーのように、人間の弱さ、利己心をあばき出すことはしない。「あらゆるところに〈よきもの〉を発見し、それを尊

ぶことが、真理愛である。」（思考と行為）。これがゲーテである。なお、ゲーテのものに、「格言集」と「語録」をミックスした形式の「ゲーテ格言集」（高橋健二訳編 新潮文庫）がある。これは、ゲーテの全著作と前記「箴言と省察」の中から、ほぼ半々の割合で選ばれたもので、内容は「愛と女性について」等 15 項目に分かれていて、引用文とその出典を明示してある。

*

「語録」

先にも述べたように「語録」は、ある特定の著書への刺激剤的役割をもつが、ここでご紹介する「シュヴァイツァーのこぼれ」（浅井真男編 白水社）は、この他に著者の人間像（伝記的意味も含めて）の理解ということに力点を置いて編集されている。

内容は「生への畏敬」から「いかに生きべきか」の 10 章に分かれ、シュヴァイツァーのほとんどの著作（講演も含む）から引用されている。もちろん、各引用文の末尾に出典を掲げてある。なお、スペースの関係で内容に触れる余裕がないが、シュヴァイツァーとは、その生活も、思想も、そして晩年も全く異なるニーチェの「語録」——「愛と悩み〈ニーチェの言葉〉」（秋山英夫編 社会思想社現代教養文庫）も併読をおすすめしたい。

〔大田区立蒲田図書館司書 広江健〕